EXPLORE

知らない自分を探検する

2018年、世界にはいまだに多くの謎が満ち、時代や地域の中でさまざまな課題が生まれています。香川大学は、世の中の真理を追究し、複雑な問題を解決するべく行動するために、人や英知が集まる知の拠点になる。そんな思いでこの4月から新学部や新学科がスタートし、今までとは違う香川大学が始まっています。新しい世界に一歩を踏み出すことは、今まで知らなかった、新しい自分の才に気づくことにもつながります。今号のかがアドでは、新しい大学の姿と、新しい自分を発見した香大人をご紹介します。

01. FACULTY OF ENGINEERING AND DESIGN 創造工学部

世の中に欠けているピースを埋めることが
多くの人に喜ばれるものづくりの出発点。

創造工学部　造形・メディアデザインコース　井藤隆志教授

井藤教授の研究室の一角には、美しくも不思議なものが並べられているコーナーがあります。動物のような動きで転がる木のオブジェ、アクリルが美しいライト、野菜が入ったプラスチックケース…。世界中の人に使われているこれらのものを作ってきたのが、創造工学部の井藤隆志教授です。教授の経歴はユニーク。プロダクトデザイナーとして情報機器メーカーで活躍したのち、イタリア・ミラノでデザイン事務所を設立。「イタリアの企業はほとんどが従業員20名以下の中小企業。本質的な価値の提供を大切にする企業をクライアントに持ち、デザイン、モノづくり、経営をみっちりと学びました」と話します。

帰国後は故郷の岐阜県でデザイン事務所を立ち上げ、大同大学の教授にも就任。地域の産業にデザインの力を掛け合わせて、機能的で美しいものを世の中に送り出し、またその手法を大学生たちに教えてきました。井藤教授が手掛け、今年発売された高齢者向け電動車いす「SCOO」を例に、教授のものづくりを見てみましょう。「世にある電動車いすを見た時に、“人間がモノとして乗らされている”という感じを受けました。自由にどこにでも行きたいという人間の自然な気持ちに、車いすがフィットしていない気がしました。同じような問題意識を持つメーカーの経営陣やエンジニアを巻き込んで“第二の足になる車いす”を作ろうとプロジェクトをスタートしました」。車いすに目が行かず、乗っている人そのものが自然に動いているように見えるデザインは、「使う人を中心に考える」という井藤教授とそのチームの考えを反映させています。

自分の作ったものが、デザインに高感度な人だけに受け入れられるのではなく、「隣に住んでいる人が当たり前のように使っているものであってほしい」という井藤教授。教授の作品は国内外のデザインの賞を数多く受賞していますが、実はコンビニや100円ショップでも手に入るようなものも多数。より多くの人に受け入れられるもの、見た目も機能もよいものが身近にあるという素晴らしさを追求しているのです。

いま井藤教授は「デザイン概論」「平面表現基礎演習」「立体表現基礎演習」の授業を担当しています。学生は2020年の東京オリンピックのトーチを提案するというテーマに取り組みながら、平面や立体の表現方法の基礎を学んでいるそうです。「トーチには機能が必要であると同時に、日本を象徴する意味もあります。デザインには機能のデザインと意味のデザインがあるのですが、創造工学部はその両方を学べる場です」と教授。「いかに視野を広げてアイデア発想ができるかが大事なのですが、その次に、自分が出したアイデアを選ぶ・自分でコンセプトを決めるということも重要です。そこに自分なりの基準があるということが大切なのです」と話します。高校生まではテストの答えはひとつでしたが、現実社会では問題解決の答えは無限にある。今までとは違う「問題」にいきいきと取り組む学生たちを、井藤教授は優しく導いています。

02. FACULTY OF ECONOMICS 経済学部

面白いものは面白い人が集まる場所で生まれる。

人とつながりまちの未来を考える、現場の経済学。

経済学部経済学科　原直行教授

観光を通しての地域活性化は、香川大学の大切な地域貢献のひとつ。経済学部の原直行教授は、グリーンツーリズムやエコツーリズムをはじめ、長年、地域の観光振興全般に携わっています。

原教授は、創造工学部八重樫理人准教授と共同で、観光者に適切な観光情報を提供するシステムの開発を行っています。特に外国人に関しては、彼らが香川のどこに行き、どこに泊まり、どのように彼らが観光情報を収集しているかというデータが全くない状況で、まずはこういった情報を訪問外国人へのアンケート調査で明らかにすることからスタートです。「先日高松駅で外国人観光客に“地下鉄の駅はどこ?”と聞かれて。高松築港駅のことだと分かったのですが、地元で人気のうどん屋さんに行くのだと聞き、どこでそんな情報を得ているのか、逆になぜ交通機関の情報が知られていないのかと驚きました」と原教授。本システムは、来年の瀬戸内国際芸術祭、さらには2020年のオリンピックを見据えて、開発がすすめられています。

異なる学部の先生が連携し、それぞれの強みを生かして、観光を通した地域活性化の課題解決に取り組むこの試み。「異なるものが出会うことで、新しいものが生まれる」という原教授が目指すのは、異分野の融合から生まれる魅力ある地域の姿です。そのため、学生にも多くの人に会う機会を提供しています。「創造工学部の先生に“文系にとっての工業デザイン”を話してもらったり、民間のIT企業社長を招いて“ICTを用いた観光振興の取り組み”を聞いたり」。これまでの観光振興に関わる様々な活動を通して、観光やまちづくりに関わる方たちと築いてきた関係があるからこそ、このような機会が提供できるのです。

さまざまな観光地の事例を見てきた原教授は「自然は“戦える”」と強調します。例えば瀬戸内。自然、素朴な暮らし、地元ならではの食…ここにしかないものを磨き上げて、景観を整備し、人を呼び込む。イタリアの田舎で実践されているような地域経済が回るしくみを作れるのではないかと話します。「それは、50年後、100年後のまちのあるべき姿を考えることでもあります。即効性を追うだけではない視点が必要ですが、考えるプロセス自体に意味があると思っています」。

最近は「地域活性化をやりたい。そのために経営を学びたい」と経済学部に入る学生も増えてきました。現場に出て地域の人と一緒に奮闘し、時には現場でお叱りを受けながら、それでもやりたいことを貫くために周囲を説得し巻き込んでいく学生たちの姿に、教授自身何度も感銘を受けると言います。「彼らはいま社会人となり、民間や行政の観光・まちづくりの現場で活躍しています」。一緒に仕事をすることも増えたという原教授。また新しい融合が生まれそうな予感です。

03. DEPARTMENT OF CLINICAL PSYCHOLOGY, FACULTY OF MEDICINE 医学部臨床心理学科

石巻市役所での被災者メンタルヘルスを通して

見えないこころを支えるための、想像力と創造力。

医学部臨床心理学科　野口修司准教授

2011年に発生した東日本大震災。その直後から被災者の方のカウンセリング等に従事してきたのが、当時、宮城県で心理学の研究を行っていた野口修司准教授でした。震災の翌年から今年の3月末まで専任の臨床心理士として石巻市役所の人事課に籍を置き、震災復興にあたる市職員の心理援助を行ってきました。「被災自治体の職員の方は、自分が被災者であると同時に被災者支援を行う職務にあるため、二重のストレスを抱えています。家族を顧みずに災害対応を行わないといけなかった自分を責める方もいます。長期化する復興業務で心身ともに疲弊しても、周りに迷惑はかけられないからと我慢している方も少なくないのです」とその状況を話します。

そこで野口准教授は市役所で「いつでも相談できるカウンセリング窓口」を開設。不眠等のストレスを抱える本人のみならず、その上司や同僚といった周囲の人からも幅広く相談を受けていました。「震災で家族が亡くなったのに自分は災害対応をしていたと自責の念をお持ちの方には、自責感を少しでも和らげることを目標に支援をしていました。ぎりぎりまで復興業務を頑張っている方には“これ以上頑張れなんてとても言えないから、あなたの大変さを周囲に伝えて助けを借りませんか?”とお話することもありました」。同時に、心の健康について知ってもらおうと全職員と管理職向けにパンフレットも作成。薄くシンプルなものにし、一度読んだ後は必要な時に思い出してもらう“お守り”代わりに使ってもらえたらという意図を込めました。

これらの活動を通して、野口准教授は長期的な支援の重要性を感じられたと言います。市職員にとって復興業務は街をゼロどころかマイナスから創り直すという他に前例のない業務。被災者にとっても復興で住環境が変わるたびに心理的負荷がかかります。状況を知っている心理援助者が長期的に関わることが求められるのではないか――。そう考える野口先生は香川大学で教鞭を執る今も、定期的に石巻市役所で心理支援を続けています。

現場を経験されてきた野口准教授に、心理職に求められる資質を尋ねたところ「想像力と創造力ではないでしょうか」という答えが返ってきました。「カウンセリングでクライアントの話を聞いて状況や気持ちに共感するためには想像力が必要ですし、個々人の状況が異なる中で、どうすれば今よりも良くなるかを考えるには創造力が必要です」。心理学の中でも臨床心理学は医学と密に関係があると言います。「メンタルヘルスは目に見えないので、自分の状況がどうかを自分では判断しにくい反面、体には不調として現れます。そんな時、医学的な知識を学んだ心理援助者がいると、どのような支援がこの人にとってベストかという選択肢が広がります」。公認心理師という国家資格の誕生で、臨床心理のニーズが社会に広がっていくのではないかと話す野口准教授。臨床と研究の両方を知る立場から、新しい臨床心理学科で、新たな時代の臨床心理の専門家を育てようとしています。